

2013年11月7日

## 2013年度第6回スポート・ジンサロン

フェリス女学院大学

和田 浩一

### 「嘉納治五郎から見たピエール・ド・クーベルタンのオリンピズム」発表要旨

(発表日: 2013年11月22日)

暴力問題などが厳しく問われる一方、オリンピック・パラリンピックの東京開催（2020年）を控える日本の体育・スポーツ界は今、体育やスポーツ、オリンピックの根本を歴史的に理解することが求められている。

本発表では、日本の体育・スポーツに多大な影響を及ぼした嘉納治五郎（1860-1938）の視点を通して、近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタン（1863-1937）によるオリンピズムの意味を議論する。

クーベルタンが産声を上げた頃、スポーツは限られた地域の雑多な楽しみごとや見せ物を漠然と指していた。それが21世紀の今、近代オリンピックの展開とともに、地球上の人々が日々の生活の中で実践する身体活動、あるいは世界中の人々の関心を集めるパフォーマンスへと大きく変化した。

このようなスポーツの興隆ぶりに対し、二人は違和感をもっていた。例えば、クーベルタンは当初から、オリンピックの理想と現実との間に横たわる「ねじれ」を自覚していたし(\*1)、嘉納もまた、ナショナリズムなどの影響を受けたオリンピック・スポーツと、人生哲学・芸術・科学になることを目指した柔道の方向性とが合はないことに気づいていた(\*2)。

発表の大半が仮説に基づく試論ではあるが、私たちの研究・教育領域の負の側面にも目を向けた嘉納とクーベルタンに学びつつ、体育やスポーツ、オリンピックに影響を与えるオリンピズムの現代的な意味について考えてみたい。

---

\*1. Coubertin, Pierre de. « Olympie », 1929; *Mémoires olympiques*, 1931; « la symphonie inachevée », 1936.

\*2. 永木耕介『嘉納柔道思想の継承と変容』風間書房、2008年、p. 139.